第4節　背割水路出土の土人形「狆抱き」について

(1) 土人形について

人形は「紙・木・土などで人間の形に作ったもの」で、古くは神の依代や呪詛の対象物として呪術的要素の強いものであったが、江戸時代に入ると、愛玩あるいは観賞用として盛行した。日本の郷土人形は、世界的に見ても種類が多く、全国各地で作られてきた（俵編1978・京都府立総資館友の会1981）。

土人形は、こねた粘土を型枠に入れて抜き、合わせて成形し、乾燥後に窯で焼き、色鮮やかな塗彩が施されたものが多い。江戸時代後期に京都の伏見人形を媒介にして、広く全国に普及したといわれている。愛玩・観賞用といった機能の他に、江戸時代の人々の実生活と関連した民間信仰が加味され、人形の種類ごとに付与するご利益が決まっていたことでも知られている（塩見1967・奥村1976）。考古学による土人形の研究は、伏見人形窯の構造や変遷の過程などを中心に進められ（木立1997・2001）、平成以降、各種開発工事に伴う近世遺跡の発掘調査の進展に伴って、遺跡出土の土人形が研究の対象として注目されるようになった（北原2000・安芸2000・関西近世考古研2008）。

(2) SD02・03（背割水路）出土の「狆抱き」

本調査区では、下層面（江戸時代）から蛙（第29図216・図版14）を除き、土人形が3点出土した（第29図214・215・217・図版14）。

ここでは、出土した土人形の中で、特徴の把握が容易である「立ち人形の狆抱き（以下、「狆抱き」と呼ぶ）」について、若干の検討を行いたい。「狆抱き」は、SD02・03（背割水路）の中央（2区）の中央付近、検出面からの深さ15～30cmから出土した。立ち人形で、胸元正面に狆（犬）を抱き、頭部を欠損する。残存高6.1cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmを測る。型抜き前後合わせ成形で、正面を中心に透明釉と緑釉が施釉され、狆の目と体には黒色の彩色が見られる。

(3) 遺跡出土の「狆抱き」

遺跡から出土した「狆抱き」は、管見に触れたもので第25表及び第64図（東京都建設局・内藤町遺跡調査会1992・四谷一丁目遺跡調査団1998・東京都埋文センター2005・東池袋四丁目再開発組合・玉川文研2007・汐留遺跡調査会1996・京都市埋文研2007・石川県埋文センター2002・金沢市2006・福岡市教委1994・福岡市教委2007・北原2000）に示したとおりである。幕府の中心である江戸城が置かれた江戸城下（東京23区）及び京都の伏見城下（京都市）、地方では九州の福岡城下（福岡市）と北陸の金沢城下（金沢市）・富山城下（富山市）からの出土で、特に江戸城下に集中する。いずれも江戸・京都といった都や地方の有力大名によって築かれた城下町で、近世遺跡の発掘調査が実施されている箇所からの出土である。

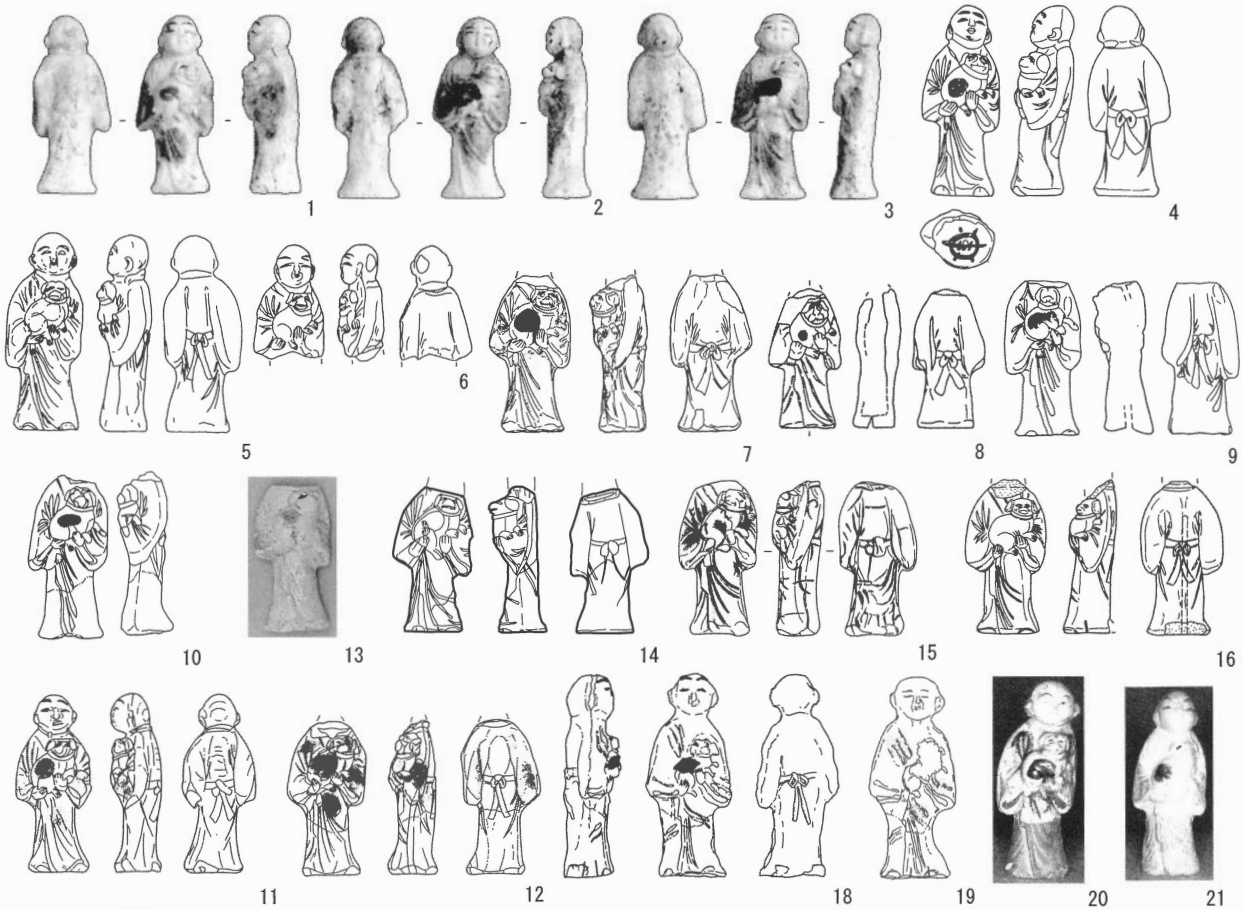
「狆抱き」は、いずれも型抜き前後合わせ技法での成形と考えられる。その規模は、平均で高さ7.79cm、幅3.17cm、厚さ2.18cmである。土人形の種類の中では小型で、ぽってりと愛嬌のある造形が特色である。その形状から、子どもを対象として流通した、安価な愛玩用であったと考えられる。

江戸城下からの出土品については、胎土が白色で透明釉に緑釉を流し掛けるものが京都産（背面に「亀」や「治」などの刻印などが有るものあり）、胎土が橙色・褐色で透明釉のみのものが江戸近郊産のものに多いとの指摘がある（安芸2001）。ここで集成を試みた「狆抱き」は、容姿・成形などの細やかな特徴に差異が認められる。伏見人形のように、土産品などとして全国的に流通したものと、福

第25表　遺跡出土の主な土人形「狆抱き」

番号	都道府県	市区町村	城下名	遺跡・人形名	出土遺構	規模 cm			成　形	施釉／塗彩	胎土色調	時期	備　考	文　献	文　献 図版番号
						高さ	幅	厚さ							
1	京都府	京都市	伏見	伏見城a	埋葬237	7.0	3.0	2.1	型抜き・前後合わせ	褐・緑・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版56-922
2	京都府	京都市	伏見	伏見城b	埋葬314	7.0	3.0	1.9	型抜き・前後合わせ	褐・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版57-942
3	京都府	京都市	伏見	伏見城c	埋葬314	7.6	3.0	1.9	型抜き・前後合わせ	褐・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版57-943
4	東京都	新宿区	江戸	新宿六丁目	2416遺構	7.9	3.3	2.6	型抜き・前後合わせ	／塗彩	白	19c前	京都系、底面墨書「亀」	東京都埋文2005	205図-3
5	東京都	新宿区	江戸	内藤町a	C-4遺構	8.3	3.2	2.3	型抜き・前後合わせ	／緑・茶・黒	白	19c前	京都系	新宿区内藤町1992	229図-10
6	東京都	新宿区	江戸	内藤町b	C-125遺構	(4.4)	3.0	2.1	型抜き・前後合わせ	／黒	白	19c前	京都系	新宿区内藤町1992	229図-11
7	東京都	新宿区	江戸	四谷一丁目	D-15遺構	(6.6)	3.4	2.5	型抜き・前後合わせ	／茶・緑	乳褐	19c前	京都系	新宿区四谷一丁目1998	60図-101
8	東京都	豊島区	江戸	巣鴨町	つつじ苑55遺構	(5.9)	3.1	2.3	型抜き・前後合わせ	釉／緑・茶・黒	白	19c前	京都系	豊島区1996	450図-734
9	東京都	豊島区	江戸	染井a	101遺構	(6.4)	3.3	2.1	型抜き・前後合わせ	灰・緑／	白	19c前	京都系、底面櫛孔・狆ぶち鉄絵	染井2001	124図-828
10	東京都	豊島区	江戸	染井b	94遺構	(6.8)	3.4	2.3	型抜き・前後合わせ	灰／	黄白	19c前	底面櫛孔・狆ぶち鉄絵	染井2001	116図-702
11	東京都	豊島区	江戸	東池袋Ⅱa	1004遺構	7.5	3.1	2.2	型抜き・前後合わせ	／赤・茶・緑	－	19c前	江戸系	東池袋四丁目2007	170図-759
12	東京都	豊島区	江戸	東池袋Ⅱb	1380遺構	(6.5)	3.4	2.1	型抜き・前後合わせ	／黄・緑	－	19c中	江戸系、底面櫛孔	東池袋四丁目2007	194図-1248
13	東京都	港区	江戸	汐留	1溝	(6.9)	3.0	－	型抜き・前後合わせ	／緑・黒	白	19c前		汐留1996	玩具写真2-63
14	富山県	富山市	富山	富山城下町	SD02・03	(6.1)	3.2	1.9	型抜き・前後合わせ	緑・透明／黒	にぶい黄橙	19c前		富山市2014	第29図-215
15	石川県	金沢市	金沢	広坂(1丁目)Ⅲ	SX1034	(6.4)	3.3	2.2	型抜き・前後合わせ	透明／緑・茶	白	19c前		金沢市2006	196図-92
16	石川県	金沢市	金沢	木ノ新保	SK252	(6.4)	3.3	2.0	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		石川県埋文2002	185図-E14
17	福岡県	福岡市	福岡	福岡城	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	－	－	－		福岡市2007	図版8-3
18	福岡県	福岡市	福岡	藤崎a	包含層	8.5	3.1	2.5	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		福岡市1994	31図-100
19	福岡県	福岡市	福岡	藤崎b	包含層	8.5	3.0	2.5	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		福岡市1994	31図-101
20	福岡県	福岡市	福岡	博多a	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	釉薬／	－	－		北原2000	図12
21	福岡県	福岡市	福岡	博多b	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	釉薬／	－	－		北原2000	図12

※立ち人形のみで、座り人形は除外した。



京都系
1 伏見城a　2 伏見城b　3伏見城c
4 新宿六丁目
5 内藤町a　6 内藤町b
7 四谷一丁目　8 巣鴨町
9 染井a 10 染井b　13 汐留

京都・金沢系
14 富山城下町
15 広坂(1丁目)
16 木ノ新保

江戸系
11 東池袋Ⅱa
12 東池袋Ⅱb

福岡系
18 藤崎a　19 藤崎b
20 博多a　21 博多b

0　1:3　5cm

第64図　主な土人形「狆抱き」と生産地
（文献4・12・16・20・31・35・44・45・67・71・72から作成）

岡博多出土資料などのように、各地の城下を中心とした窯元で製作されたものに大別できると考えられる。本調査区で出土した「狆抱き」は、新宿区四谷一丁目遺跡や金沢市広坂（1丁目）遺跡出土のものによく似ており、施釉及び胎土から京都・金沢系のものと考えられる。

第65図　描かれた土人形「狆抱き」
（文献10から）

(4)「狆抱き」の出現と普及・定着

土人形の出現は、17世紀中頃と考えられ、18世紀以降になって各地の城下町から多量に出土する傾向が指摘されている（関西近世考古研2008）。伏見人形に目を向けると、寛文六（1666）年に再板された「ひな人形の古実」にて、「狆抱き」の姿が描かれている（第65図）。伏見人形では、17世紀後半にはその容姿・造形が定着していたことが理解できる。しかしながら、愛玩的な童子人形は、18世紀後半～19世紀前半にかけて、各地の城下町から多く出土する傾向で、この時期に各地の城下町において普及・定着したことを窺い知ることができる。

この背景としては、江戸を中心とした町人文化が最も華やいだ元禄や化政文化の時期に該当することから、節句行事や民間信仰の盛行との結びつきによって、窯元及び商人を媒介とした土人形の生産・販売の増加と、商工人などの町人（民衆）を中心とした購買層の増加が相乗した結果、城下町を中心に土人形の普及・大衆化が進んだことが考えられる。本遺跡出土の土人形も、当該期のものと考えられる。江戸や金沢といった主要な城下町同様に、富山城下町においても、江戸を中心に開花した町人文化の賑わいと繁栄の定着がなされていたことが想像できる。

(5) 小　結

最後に、「狆抱き」の意味について考えてまとめとしたい。「狆抱き」は、福岡博多では、ねぶり（嘗め）人形と呼ばれたようで、子どもが嘗めてしゃぶる人形として扱われてきた（福岡市教委1994・北原2000）。伏見人形での「狆抱き」は、饅頭喰いなどの童子人形の一群に分類される。童子人形は、子どもの成長と健康を祈願するためのものといわれる。一方、狆は、愛嬌ある風貌から、「狆ころ」とも呼ばれたようで、子どものひきつけ防止や守り神としてのご利益があったようである（塩見1967・奥村1976）。

「狆抱き」は、前述のとおり、その形状から子どもを対象として流通した安価な愛玩用であったものと考えられるが、子どもが健康に育つためのお守り的意味を持った存在であったことも考えられる。

（基峰）